

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第191号

白井義胤翁
を訪ねて12

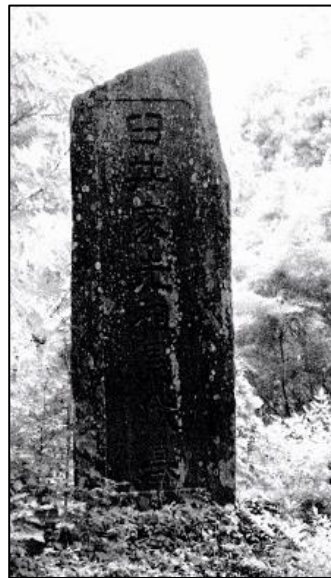
墓地の整備と墓碑の建立

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

最後の仕事に

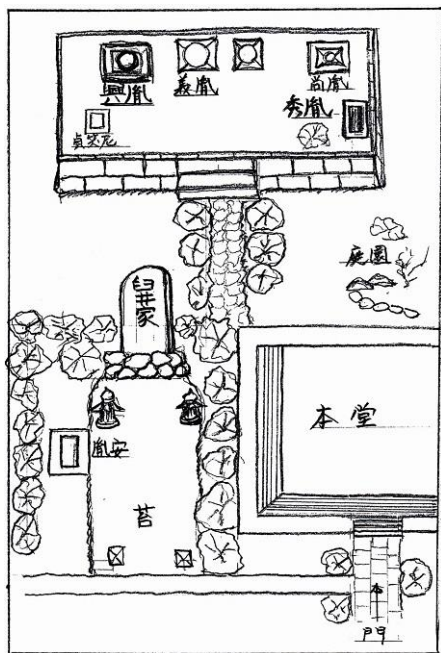
義胤翁が円応寺を初めて訪れたのがいつかは、はっきりしません。分かっていることは大正中期から頻繁に円応寺を訪れるようになったこと、同時期に白井の地に広い土地を購入し、湿地を干拓して農地に替え、その一郭に瀟洒な別宅を設けたことなどです。この時翁は70代後半に差し掛かっており、さすがに体力の衰えを自覚したのでしょうか。白井家の再興を託され、白井義胤を名乗ることになった自らの成し遂げたこと、なお果たすことが出来ずに子孫に託さざるをえないことなどについて、先祖に報告することも晩年の重要な仕事と考えたであろうことは、想像に難くありません。

義胤翁は、関東大震災(1923年・大正12年・9月1日)で墓石が倒れるなどの被害を受けた、円応寺境内の白井家累代の墓地を再整備すること、この地に自らと妻女の墓を設けて、墓地の一員として迎えてもらうことを考えたのです。筆者は2022年(令和4年)4月、義胤翁の曾孫小林一夫氏と「白井八景・八ヶ寺めぐり実行委員会」代表の森秀夫氏にご案内いただき、円応寺の白井家墓地を見学する機会を得ました。そこには白井家の始祖六郎常安に始まる白井家に連なる人々の墓石が連なった旧墓域と、義胤翁が特に重要と考えた数人の人物を選んで別に整備した新墓域の二区画が隣り合っていました。二つの墓域の境には、大正12年に義胤翁が建立した「白井家先祖累代之墓」と記された大きな墓碑が立っています。円応寺の山門を入れて本堂に向かわずに墓域に至る小道を辿ると、正面の位置にこの墓碑が見えるのです。案内されて墓碑を見つめた時、筆者は義胤翁の先祖に対する敬愛の念の深さに感動を覚えました。



白井家先祖累代之墓

白井家の墓碑を整備した義胤翁は、いよいよ新墓域の整備に取り掛かります。ここに翁は、波乱万丈の生涯を過ごしながら、受けた恩義を生涯にわたって忘れなかった篤実の人6代興胤と、その子にして7代城主の尚胤の墓を据え、中央に翁自身と正妻やす女の墓を並べて配置したのです。さらに『千葉白井家譜』を書き残し、白井家の勃興から衰退までを世に残してくれた白井の家系に連なる秀胤(白井に隠棲後は信齋と号した)と、彼と共に晩年を白井の地で過ごした妹の貞笑尼の墓を、4体の墓石を守るかのように左右に配置したのです。墓の配置については、下記に掲載



白井家の墓碑と新墓域の配置図

した白井八景・八ヶ寺巡り実行委員会編の『白井城主興胤と五人の恩人』記載の手描き図をご覧ください。

白井の先祖代々の墓地を整備した義胤翁には、もう一つ心残りがありました。それは自分は家を出て白井本家の養子となった身であっても、姉が婿養子となった銀治義兄と守ってくれた実家の白井改め碓井家のことです。義兄夫婦も既に故人となっていたことから、翁は自分にできるせめてもの供養にと、下麻生の実家の敷地の一番奥に、白井の円応寺に建立した白井家先祖累代之墓と同じ大きさの墓碑を建立したのです。今シリーズの第1回に写真を載せましたが、「白井家累代之墓」と記された立派な墓碑で、昭和2年(1927年)8月に義胤翁が建立した旨が、裏面に記されています。

先祖への報告と供養のための墓石と墓域の整備は、こうして終えたのですが、翁にはどうしてもなさねばならぬと心に決めた事がなお残っていました。6代城主興胤の危難を未然に防いだ忠臣岩戸胤安と胤安に若君の危難を知らせたお付き女中(事実上の乳母)、この二人の顕彰碑の建立です。乳母は、竹若の暗殺を防がれたことを怒った志津胤氏に惨殺され、岩戸胤安も一族揃って抹殺されて、お家断絶の憂き目を見ていたのです。義胤翁は両名の功績を何としても後世に残したいと固く決心していたのです。続く

シリーズ
禅寺丸柿の歴史 1

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培(1)

相澤雅雄(都筑・橘樹研究会会員)

はじめに

本連載は、筆者が令和 5 年(2023)7 月 16 日(日)に柿生郷土史料館主催の第 87 回カルチャーセミナーで講演した「柿生の名産「禅寺丸柿」の歴史」を修正・補筆したものである。連載に当たっては、近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培の歩みを踏まえながら禅寺丸柿栽培について記すこととした。

ついては、次の 4 項目を主にとりあげていくこととする。①近代における多摩川右岸及び鶴見川流域での梨や桃或いはイチジクといった果樹栽培について、②品種「禅寺丸」について、③禅寺丸柿栽培が都筑郡及び橘樹郡の北部地域でなぜ盛んであったのかについて、④禅寺丸柿の枇杷島市場(現・愛知県清須市西枇杷島町)への出荷がなぜ可能となったのかについて。

近代における川崎市域及び横浜市北部地域での果樹栽培

最初に、近代における川崎市域及び横浜市北部地域(多摩川右岸及び鶴見川流域)での果樹栽培の歩みを探ってみる。多摩川右岸における梨や桃の果樹栽培の歴史は古く、確認できただけでも江戸時代後期の化政期(1804～1830)まで遡れる。江戸幕府編さんの『新編武蔵風土記稿』(以後『風土記稿』と略す)の橘樹郡(文政 13 年に成る)の物産の項に「梨子 川崎領ヨリオシナヘテ作出ス ソノ種類甚多シコレハ近キコロヨリ多ク種ルト云」と、川崎宿周辺の各村で梨の生産が盛んで、その産



絵葉書「南武鉄道沿線名勝 沿線到る所梨花の海」筆者蔵

出量が多かったことを記している。また三河国の田原藩藩士渡辺華山は、文政 4 年(1821)6 月 28 日に江戸の田原藩上屋敷を出発し、江ノ島へ二泊の旅をしているが、その時の記録『使相録』(『華山全集』)に品川から六郷の渡しを経て川崎宿を過ぎ東海道筋の市場村や鶴見村で、家々が梨の樹木を植えている光景を見て書き留めている。街道筋の村々では、稲作から梨栽培へと移行し、東海道の路傍で戸板に並べて行き交う旅人相手に梨を売るといふ。さぞかし旅人の喉の乾きを潤したことであろう。また幕臣で狂歌の達人として著名な大田南畝は、60 歳のとき文化 5 年(1808)12 月から翌年 6 月まで幕府から玉川治水の視察を命じられて、その流域を調べて回った。この視察で余暇を使って様々な市井の雑事などを記録している。その時の記録が『向岡閑話』(『日本随筆大成』)である。今日では多摩川流域の地域史研究に数々の恩恵を与えてくれる貴重な記録となっている。今回の梨の栽培についても大いに役立った。同書によると、多摩川沿いの中野島村(川崎市多摩区)で梨の種類に注目して、四日市かんのう寺梨、すげなしの種類が多いと書き留めている。さらに村の里正(名主)から聞いた話として、多摩川梨の栽培はこの中野島村が発祥の地であるが、今は川崎辺が多いことを書き添えている。さらに同書によると、多摩川沿いの宿河原村(川崎市多摩区)の辺りでは、棚をかけて梨を作る家が多く、カンノウ寺という至って大きな梨の品種を栽培しているという。このように江戸時代後期には、多摩川右岸流域の沖積地で、梨の栽培が盛んに行われていて、その歴史の古さがわかる。

近代に入っても多摩川流域での梨の栽培は、継続して行われてきた。例えば、明治 13 年(1880)刊の再版本「日本地誌略物産弁」(『日本物産誌』八坂書房 昭和 54 年)をみると、武蔵国の物産として「梨(橘樹・荏原二郡)」と、橘樹郡と荏原郡の物産「梨」をとりあげている。なお本書には、禅寺丸柿を記載していない。明治 8 年の初版本『日本地誌略物産弁卷之一』では、武蔵国の物産として「梨」の記載はないことから、再版本で「梨」が追加されたことがわかる。明治末期に入ると、川崎市域の南部に工場が進出しだし、これら工場から吐き出される粉塵などの影響を受けて梨の栽培は不利となり、しだいに撤退せざるを得なくなった。このため中原・住吉・日吉方面や高津・生田・向丘方面が産地の主流となった。

続 く

シリーズ
歴史の中の女性像 8

その 1 ナイチンゲールの世界 (8)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

クリミア戦争と新聞の役割

1853 年 10 月に始まった露土戦争は、ロシアが黒海艦隊の地中海への進出を目指して、当時病める大国と評されていた、落ち目のオスマン帝国を挑発して始めた戦争でした。当時ヨーロッパ世界の 2 強と言われていた海軍主力のイギリスと、陸軍主力のフランスは、当初はこの戦争に介入する意思を持ちませんでした。しかし、11 月に入って、トルコ海軍がロシアの黒海艦隊との海戦で、壊滅に近い惨敗を決したのを見て態度を変えます。このままでは東地中海(バルカン半島以東を指します)がロシアの海になってしまう。そうすると本国からインドや東南アジアへ運ぶ商品を、エジプトのポートサイドで陸揚げしてスエズに運び、そこで再度舟積みするルートが使えなくなってしまう。このルートは、アフリカ南端の喜望峰を経由するルートに比べ、遥かに短期間にしかも安全に商品の輸送が出来る、手放すわけにいかない大切なルートでした。ここはトルコの味方をしてロシアの地中海進出を阻止しなければならないと、日頃は仲が良いとは言えない英仏両国が、この時ばかりは短期間で意見の一致を見たのです。

1854 年 3 月、英仏両国はオスマン帝国に肩入れしてロシアに宣戦を布告します。参戦直後英仏両国は、オスマン帝国領ブルガリアから黒海西岸を北上してオデッサを攻撃する方針を立てたのですが、この戦争に中立を宣言したオーストリアが、国境を封鎖したため、この計画は実現不可能となり、英仏両国は直接クリミア半島に上陸し、ロシア海軍の要衝セヴァストポリの占領を目指すことになったのです。世情名高いセヴァストポリ要塞の攻囲戦です。ここからこの戦争はクリミア戦争と呼ばれることになったのです。ヨーロッパにおける大国同士の戦争は、1815 年に終結したナポレオン戦争以来およそ 40 年ぶりの出来事でした。

そしてクリミア戦争には、もう一つ特筆すべき特徴がありました。それは 1830 年代から次第に普及し始めた新聞社の一部が、他紙との差別化を図るために、戦地からの報道を読者に届けることで発行部数を伸ばそうと、初めて戦場に記者を派遣したことです。従軍記者がここに誕生したのです。とりわけイギリスでは『タイムズ』の敏腕記者ウィリアム・ラッセル氏の従軍記が評判を呼び、結果的に彼の記事がフローレンス・ナイチンゲールを戦地に派遣することに繋がるのです。

新聞の発行は、印刷術の普及と共に始まったのですが、なんとといっても新聞の存在を社会が認知

するきっかけになったのは、フランス革命でした。諸勢力がその主張を開陳する政治新聞が評判になったのです。発行は不定期でしたから定期購読などはあり得ず、支持者が街頭を売り歩いたのです。こうした新聞を日刊化したのは、フランスの七月王政期(1830 年 7 月~1848 年 2 月)に『ラ・プレス』紙を発行したエミール・ド・ジラルダンでした。彼は新聞広告を採用したこと、折から開通したパリ~オルレアン間の鉄道を利用して、パリ近在の地まで売り歩いたことで単価を下げ、従来の新聞の半値以下での発行を実現して、購買層の拡大に成功したのです。また当時の流行作家を動員して新聞小説の連載を始めて日刊新聞の普及に貢献したのです。しかし、19 世紀の中頃という時代では、報道価値の高いニュースの迅速な収集に難がありました。パリやロンドンの市域の出来事であればともかく、離れた地域や外国の情報、ましてや植民地のことなどは、何日も遅れて到着します。速報性の持てない新聞を日刊化しても市民の関心を引き付けることは難しかったのです。この時代英仏などの近代化先進国でも、定期購読者を持ち経営的に安定していたのは、内容の濃さを売りにして情報を深く掘り下げた週刊新聞だったのです。

クリミア戦争取材した『タイムズ』のラッセル記者は、戦地や軍の野戦病院を精力的に取材して、次々に長文のレポートを本国に送りました。彼のレポートは反響を呼び、道行く人々やコーヒーハウスなどでの出会いの挨拶も「タイムズを読みましたか」と始まっていたと、『タイムズ』の記事を気にしていた軍の調査報告にまで記録されるに至ったのです。

続 く



『タイムズ』紙の紙面

祝・川崎市誕生百年

次回企画展は、川崎市市制百周年記念に合わせて、市制100年を振り返ります。

川崎市の誕生

川崎市は首都東京と港湾都市横浜に挟まれた工業地帯として成長した南部の臨海工業地帯と、その後にベッドタウンとしての開発が進んだ北部の丘陵部という二つの顔を持つ、南北に細長い市域で構成されている。

- 1924年(大正13年) 7月 関東大震災の翌年、横浜市、横須賀市に続いて、県内3番目に市制が敷かれた。橋樹郡の川崎町、御幸村、大師町が合併して誕生。人口約5万人、面積22,23km²
- 1927年(昭和2年) 4月 橋樹郡田島町を編入。
- 1933年(昭和8年) 8月 橋樹郡中原町を編入。
- 1937年(昭和12年) 4月 橋樹郡高津町と日吉村の一部を編入、6月に橋樹郡橋村を編入。
- 1938年(昭和13年) 10月 橋樹郡稲田町、向丘村、宮前村、生田村を編入。
- 1939年(昭和14年) 4月 都築郡柿生村・岡上村。川崎市に編入、柿生村・岡上村(現柿生地区)は川崎市編入85周年。臨海部の埋め立て地を除き、現在の市域となる。

鉄道と川崎市

鉄道の発達に伴う工場建設の内陸に向かっての拡大に伴って市域を拡大していった。市の西部丘陵地帯は、ベッドタウンとして開発され、住宅地となった。

- 1926年(大正15年) 2月 現在の東横線が小杉町内で開業。
- 1927年(昭和2年) 3月 南武線川崎～登戸間開業。
- 同 年 4月 小田急全線開通。稲田登戸(現在の向ヶ丘遊園)駅など開業。
- 同 年 7月 田園都市線開業。
- 1937年(昭和12年) 陸軍研究所生田村に移転(登戸研究所)。

その後の川崎市

- 1972年(昭和47年) 4月 政令指定都市となる(福岡・札幌と同日)。大阪市、横浜市、名古屋市、京都市、神戸市、北九州市に続いた。政令指定都市となった時点の人口 993,000人。川崎区、幸区、中原区、高津区、多摩区の5区。
- 1982年(昭和57年) 7月 高津区と多摩区を分区。宮前区と麻生区が誕生。
- 2023年(令和5年) 現在 人口154万人、面積144,35km²、人口密度1km²あたり11,000人。最大は大型マンションが林立する武蔵小杉周辺を含む中原区が1km²あたり18,000人。最少は山林・農地の残る麻生区が1km²あたり8,000人。川崎市は現在も人口増が続いている。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日 : 4月6・20・27日(土曜日) 5月12・19・26日(日曜日)

◎開館時間: 午前10時～午後3時

第91回カルチャーセミナー

大塚・歳勝土(さいかちど)遺跡 の稲作について

講 師: 橋口 豊 氏(横浜市歴史博物館学芸員)
 日 時: 4月27日(土) 13時30分～15時30分
 会 場: 柿生郷土史料館(柿生中学校内) 特別展示室
 参加費: 無料 どなたでも参加できます。

大塚・歳勝土遺跡は横浜市歴史博物館に隣接した一帯に、遺跡公園として整備されています。大塚遺跡は、弥生時代中期のほぼ完全な形で全体像が確認できた、全国的にも大変珍しい環濠集落で、歳勝土遺跡は大塚遺跡の墓域として作られた墓地遺跡です。

遺跡からは、粳をまとった状態での米も少なからず発掘されており、当時周辺で稲作が普及していたことがわかります。

橋口学芸員は、弥生期の稲作の研究を続けられており、昨今の研究成果を踏まえて、当時の稲作について分かりやすくお話させていただきます。

皆様の参加をお待ちしています。



大塚遺跡の復元家屋



歳勝土遺跡(墓域)が示されています

柿生郷土史料館友の会 第14回史跡見学バスの旅

佐倉・臼井への旅

～歴史民俗博物館と臼井義胤氏の源流を訪ねて～

日時 2024年4月18日(木)

集 合: 7時45分 新百合丘駅北口(21ビル前の歩道)

解 散: 18時頃 新百合丘、その後柿生駅近く。

募 集: 45名

参加費: 8,500円(昼食付き)

申し込み: 往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで、または marat17930713@mail.fcservice.jp まで

必要事項: 参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号。

送付先: 215-0021 川崎市麻生区上麻生6-40-1 柿生中学校内柿生郷土史料館へ。(お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です)

申込締切: 4月10日(水)

問合せ先: 小林基男 080-5513-5154

またはメール

marat17930713@mail.fcservice.jp